

滋賀・服部遺跡

- 1 所在地 滋賀県守山市服部町
- 2 調査期間 一九七四年（昭49）～一九七九年
- 3 発掘機関 滋賀県教育委員会・守山市教育委員会
- 4 調査担当者 大橋信弥・山崎秀二
- 5 遺跡の種類 水田跡・墓地跡・集落跡
- 6 遺跡の年代 縄文晩期～鎌倉前期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

服部遺跡は、琵琶湖の南、一級河川「野洲川」の下流、天井川化した南北二分流にはさまれた中洲に所在する。一九七四年（昭四九）八月、建設省が実施する野洲川改修／放水路／工事中に見えられ、四次にわたる調査を実施した。

調査は、入放水路Vの幅、東西二〇〇m、延長南北六〇〇m、総面積十二万平方メートルにおよび、旧田面下三mまで、各時代の遺構が何枚も重複して認められた。検出された主要な遺構は、(一)弥生前期水田跡・同集落跡、(二)弥生中期方形周溝墓群・同集落跡、(三)古墳前期集落跡、(四)古墳中・後期古墳群、(五)奈良・平安時代掘立柱建物群などで、コンテナ三〇〇〇箱以上にのぼる土器類をはじめ、大量の木器、石器の出土をみた。

木簡を出土したのは、調査域を約一〇一mの間隔で、平行して東から西に流れる二条の溝で、いづれも、その下層から、奈良時代後期の須恵器・土師器を伴って出土した。二条の溝は、今日まで使用されている条里の条界を走る水路の直下で検出されたもので、この地域の条里施行の上限を示すものと言えよう。奈良時代に所属する掘立柱建物跡には二群が認められ、主軸を正南北にとり、比較的大きな柱穴をもち、建物の規模も大きいA群と、建物の方位を条里に規制され、やや小規模な建物の多いB群で、木簡を出土した二条の溝が、後者に関連することは言うまでもない。溝内からは、木簡のほか、大量の墨書土器をはじめ、「乙貞」銘の銅印、和同開珎など四種の銅銭、帯金具、横櫛などが出土をみており、右の二群の建物群が、『和名抄』所載の野洲郡服部郷の中心的な遺構であることを強く示唆すると言えよう。

8 木簡の釈文・内容

木簡は、絵馬と考えられるもの、曲物の底に墨書したものを含めて、計五点を数える。

- (1) 掛□一斗 $162 \times 25 \times 4$ 033
- (2) ×□野家五人 未一人
□□□□□_{〔人カ〕} $(128) \times 28 \times 4$ 019
- (3) 「写□□阿此美」_{〔豆カ〕} 奴志□□□□□□□_{〔一斗〕} $(152) \times 31 \times 1$ 019

『服部遺跡発掘調査概報』

以上五点のうち、(1)のみが、南側の条里溝(SD7)、(2)～(5)が北側の溝(SD5)から出土しており、(4)にみえる「鳥」は、前述の墨書土器にも、大量にみえており、「鳥益」という墨書を含めるなら30点以上にのぼる。本遺跡の性格を考える上で、注目されるところであろう。

$$164 \times (44) \times 4 \quad 061$$

徑162×2 061

滋賀・畑田廃寺跡

- 1 所在地 滋賀県愛知郡愛知川町畑田字西鳥居
- 2 調査期間 一九七八年(昭53)七月～一九七九年(昭54)三月
- 3 発掘機関 滋賀県教育委員会
- 4 調査担当者 近藤 滋
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の時代 白鳳時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

畑田廃寺跡は大字畑田集落の南に所在し、古くより礎石や瓦の出
土が伝えられていたが、具体的な位置、範囲等は不明確であった。

発掘調査は県営は場整備に伴い実施したもので、排水路及び削平計画区域を対象に約一三〇〇〇㎡発掘した。

遺跡の概要は雨落ち溝を巡らせ、東西三〇m、南北一八mの基壇幅を持つ建物跡を中心に、二×一間の細殿の他、一五棟の掘立柱建物・柵・溝・土壇・金工房・井戸等が検出された。また、寺域東外地区からは当寺の建設にかかわる竪穴や高床の住居跡も検出されている。

検出した遺物は須恵器・土師器・緑灰釉陶器・輸入磁器・瓦・木製品・石製品と埴埴・甕の羽口・銅滓・銅製品等の金工関係の遺物